

# 上野の 原爆の火 20周年で歌のつどい 全国の火の交流サミットも

核兵器廃絶と平和の願いを下町から発信しようとして、上野東照宮の境内に「広島・長崎の原爆の火」が灯されて20周年を迎えるのを記念して、17日に「原爆・平和の火」サミット・交流会、18日に「2011非核・平和をうたうつどい」がそれぞれ開かれます。

下町の庶民の平和と文化を守ろうと活動する「下町人間のつどい」が、上野にこの火を灯そうと提唱し、数万人が参加した募金によって、90年8月に点火されました。

17日のサミット(台東区民会館9階、午後1時半〜)は、全国で灯されている平和・原爆の火の関係者が集まり、経験を交流しようというものです。

原爆の火についてはこれまで、星野村から分灯されたものや、88年に国連軍縮特別総会に向けて全国を

まわった「広島・長崎の火リレー」で分けられた火が、各地にあることが知られていたものの、全体像は分かっていませんでした。

サミット実行委員会で、鳥取県原水協の伊谷周一理事長がまとめた資料をもとに、各地の分灯先に電話をかけて調査。すでに火を消したところもあったものの、新たに判明したものも含めて、いまも国内45カ所、海外2カ所に火が灯されていることが分かりました。

また、18日の「非核・平

和をうたうつどい」(日比谷公会堂、午後1時半〜、大人1千円)は、原爆の火に込められた平和を願う心を、未来へ引き継ごうと開



「ぞうれっしやがやってきた」の練習風景Ⅱ2日

くものです。

戦後直後に「本物の象が見たい」と声を上げた台東区の子どもたちをもとにした合唱構成「ぞうれっしやがやってきた」や、星野村の火をテーマにしたカンタータ「この灯を永遠に」が演奏されます。

今回、「ぞうれっしや」の合唱には、中国残留孤児として育ち帰国した人々も参加します。帰国者には日本語が十分にできない人も多く、東京ぞうれっしや合唱団のメンバーも参加して練習を続けてきました。

「うたうつどい」は、福島第一原発事故で福島から避難している被災者から申し込みがあれば、無料で招待します。問合せ03(3818)6151小野寺協同法律事務所。